

展覧会のお知らせ

■ 常設展示

「小川原脩展 馬・犬・おおはくちょう」

小川原脩は画業を通して動物たち、とくに馬・犬・おおはくちょうを題材にしました。馬は初期の頃より登場し、1970年代からは荒々しい犬の群れ、そして大白鳥は優しい群れとして描かれます。また、晩年の作品における動物たちは包み込むような温かな空間を生み出しています。悲哀や寓話、人間社会や自らの境遇が投影された動物たち。小川原脩の世界をお楽しみください。

会期：開催中～7月9日（日）

■ 企画展示

「小川原脩セレクション 根津夕景—1930's」

1930年代のはじめ、小川原脩は東京・根津八重垣町に下宿し自由闊達な空気を吸いながら上野の東京美術学校（現在の東京藝術大学）で油彩画を学びました。本展では1929年の石膏スケッチからはじまり、美校時代の秀作、そして30年代後半のシュルレアリスム（超現実主義）との出会いに至るまでをクローズアップします。また、「納屋（1933年）」を修復後をはじめて展示いたします。

会期：開催中～7月9日（日）

アート・イベントのお知らせ

■ アート・トーク

「帰ってきた小川原脩～よみがえる『納屋』」

東京美術学校（現東京芸術大学）在学中に帝展入選を果たした「納屋」。80年以上の時を経て危機的状態に陥っていた名作が、入念な修復により元の姿によみがえる過程を伝えます。

日時：6月3日（土）14時～15時 会場：展示室（要観覧料）

お話し：沼田 絵美（当館学芸員）

■ 土曜サロン

アート探訪〈みて☆きいて〉2 「フェルメール 静寂のフェルメール」

17世紀オランダの画家フェルメール。残された作品は、わずかに30数点。彼の生い立ちや生涯に関する数少ない資料をもとに、実像を求めて出生地デルフトを訪ねます。

日時：6月10日（土）14時～15時

お話し：柴 勤（当館館長） 会場：当館映像ルーム（聴講無料）

■ アート・シネマ館

「真珠の耳飾りの少女」(2003年/100分/イギリス・ルクセンブルク(字幕))

「青いターバンの少女」とも呼ばれるフェルメールの作品に着想を得た小説を映画化。天才画家と類まれな色彩感覚の持ち主で画家に靈感を与えた使用人との恋物語。

日時：6月17日（土）14時～15時50分

お話し：柴 勤（当館館長） 会場：当館映像ルーム（聴講無料）

■ ミュージアム・コンサート

「サウンド・カラーズ -絵と音の出会い-」

小型チェンバロ「スピネット」を新たに製作したドイツ人職人クライスさん、その扉に羊蹄山を描いた徳丸滋さん、チェンバロ奏者の森さん、フルート奏者の大淵さんの4人による一大コラボレーション。

出演：森洋子さん（チェンバロ奏者）、大淵宏一さん（フルート奏者）

楽器：スピネット（小型チェンバロ）＝製作：ミハエル・クライスさん（パイプオルガン製作者）

＋扉絵：徳丸滋さん（画家）

日時：6月24日（土）14時～15時 会場：当館ロビー（無料）



小川原脩記念美術館 倶知安風土館

☎ 21-4141

☎ 22-6631

開館時間は9時～17時
(入館は16時30分まで)

6月の休館日
6日、13日、20日、27日

美術館から

札幌から倶知安への道すがら、今朝もまた携帯電話で羊蹄山の写真を撮り、家族や知人に送ってしまいました。山頂の白い雪と裾野の緑、畑の茶色が織りなす光景がこれまでになく新鮮に美しく見えたのです。この時は、自分の眼も少年のように輝いていたんだろうな、きっと。

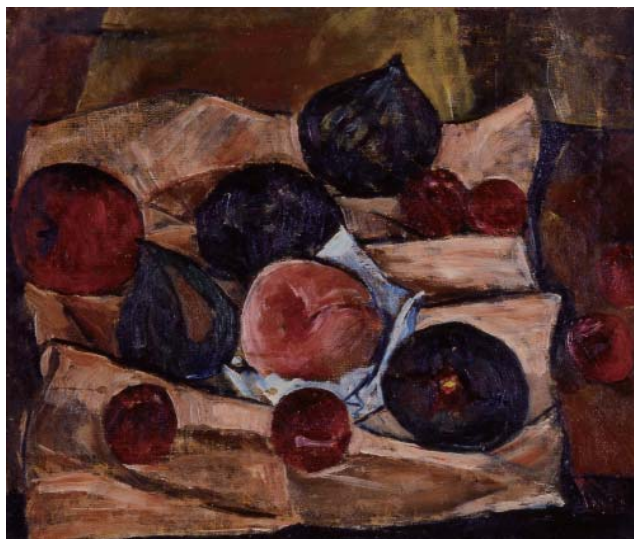
穢（けが）れのない眼でものを見る、これは案外と難しいこと。特に美術作品の場合は。仕事柄でしょうが、私などは、展覧会に行っても頭で知識で、他人の言葉で作品を見ているな、と自覚することがしばしば。でも、これはいけない。余計な先入観、思い入れを取り払い、自分だけの眼で楽しむ。それこそ絵を独り占めして見る醍醐味のはずなのですから。

館長 柴 勤

感動一点 の場

『静物』

1935年頃 小川原 脩 画



果実が主題となっている静物画で、大きく皺のよった固い包み紙の上、南瓜、桃、スモモ、そしてリンゴが、無造作に置かれた様子を描かれている。桃はさらに白い紙に載せられ特別な存在感を醸し出し、スモモのいくつかは机の上に転がり落ちて、机の奥から手前にかけての配置にリズムが加わって面白い。

1935年は、小川原脩が東京美術学校を卒業した年であるが、その前後、アカデミックな美校カラーからの脱却と自らの進む方向性を求めて、創作上の苦悩を抱えていた。つまり自分の仕事として「何を描くか」を模索しはじめたのだ。今に残る当時の作品では、卒業制作のための習作「裸婦」などがあり、若い画家の確かな描写力が発揮されているように思うが、小川原本人は暗い色調の作品が続いた時期であったと振り返っている。この作品もまた、迷いの中で描かれた一点である。

文：沼田 絵美（小川原脩記念美術館 学芸員）

—萌ゆる春の紅葉—

暖かく、気持ちのよい季節になりました。ヤナギやシラカンバの柔らかい若葉を見ると、初々しい気持ちになります。

ところで、春の景色には緑の葉だけでなく、アカイタヤやエゾヤマザクラなどの赤い葉があるのをご存じですか。秋の紅葉のように葉が赤く色づくことから、春紅葉（はるこうよう）と呼ばれます。このような赤い葉は、どのような仕組みで色づくのでしょうか。

私たちが夏に見る緑の葉は、葉に含まれる葉緑素の色です。葉緑素には光のエネルギーを吸収する働きがあります。秋になると、葉緑素が分解され、葉の地色が現れることで黄色く見えますが、赤く色づくのは、葉緑素が分解された後、さらにアントシアニンという赤色の色素がつくられるためです。春の紅葉も同じく、アントシアニンによるものです。ちなみに、なぜ木々がアントシアニンを作り出すのかはまだよくわかっていません。

開きかけの赤い葉からは、秋の紅葉とは異なり、みずみずしさと美しさが強く感じられます。緑や赤の葉が芽吹く一方で、赤や黄色、白の花が彩りを加えると、数か月前まではモノトーンであったことがまるで嘘のようです。

除雪が大変な倶知安ですが、雪が多いからこそ、変化も大きく感じられるのではないのでしょうか。春紅葉を見るには少し時期が遅いですが、外には他にもさまざまな魅力が溢れています。とりあえず、外に出かけましょう！

私事ではございますが、今年の1月から倶知安風土館で勤務することとなりました生涯学習専門員の上井達矢です。若葉のように未熟で色も決まっていませんが、柔らかさと若々しさと倶知安の発展に少しでも寄与できたらと思いますので、どうぞよろしくお願ひします。

文：上井 達矢（倶知安風土館 生涯学習専門員）

ふる探訪 さと

411回



▲鮮やかな葉で色づく森